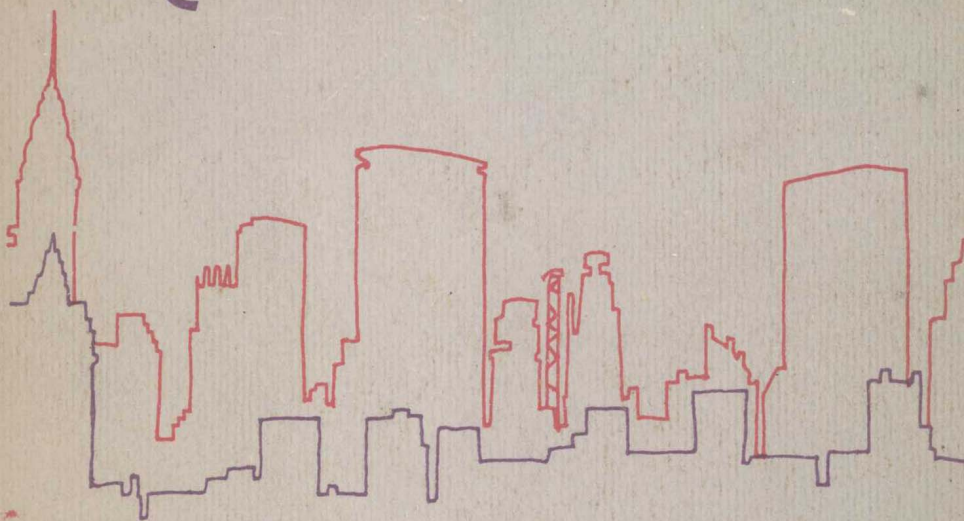


三神真彦
流刑地にて



流刑地にて

三神真彦

筑摩書房

流刑地にて

昭和四七年四月一〇日 印刷
昭和四七年四月一五日 第一刷発行

著者／三神真彦
みかみまひこ

発行者／井上達三

発行所／株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一七六五二（代表）
振替東京四一二三 郵便番号一〇一一九一

印刷所／三晃印刷

製本所／積信堂

定価八〇〇円

©Masahiko Mikami Printed in Japan 1972

目次

流刑地にて 3

平穏な日々 143

裴
頓
坂
口
康

流刑地にて

第一章

今日ぼくが二十三歳になったことを知らせてくれたのはガスマール夫人だった。昨夜は週に二日皿洗いの仕事をしている下町のレストラン「裸の町」に出る夜だったので、アパートに戻りベッドに入ったのは今朝の五時過ぎだ。だから十一時前にかかってきた電話のベルは、なんとも腹立たしい不愉快な雑音だった。睡りの中で、そいつは遠くから鳴り始め、妙にいらいる正確な間合いで鳴り続け、ぼくは断ち切れようとする睡りに執着しながら、ベッドを離れるまで決して猶予しそうにないそいつの呼び声を十三回数えた。ぼくは不貞腐れてベッドを降り、なるべく乱暴な方法で受話器をとりあげたのだが、そんなぼくの礼儀知らずの振舞いにも頓着しないガスマール夫人の優しく澄んだ声がきこえてきた。

「ケン、（ぼくは黒田健一という日本人の若僧だけれど、この国の人たちはたいにいぼくをケンと呼ぶのだ）あなたに連絡がついて本当によかったわ」

いつものことだが、ガスマール夫人の声をきくと、ぼくの感情は柔らかない羽根で撫でつけられたような快さを味わう。どんなにささくれ立った感情もいつとき鎮められてしまう。その声で、夫人は二十三回目の誕生日おめでとうと告げ、東京にいる母親の代りに今夜誕生祝いをしたいが都合はどうかと尋ねた。二十三歳の誕生祝いの晩餐など他人事のようにしか思い描けないけれど、今夜はなにも予定がなかったし、咄嗟の間にぼくの心はガスマール夫人に対する懐しさに甘酸っぱく充たされていたので、彼女の申し出に精一杯の言葉で礼を言い、夕刻の訪問を約束して丁重に受話器を置いたのだった。

ぼくはいくらか呆然とした気分でベッドに戻った。枕元に投げだされた潰れかかったハーフ・アンド・ハーフの紙袋を探り、ひしゃげた巻煙草を取り出して火をつけた。煙草の煙りはゆっくり立ち昇り、壁に貼ったマリリン・モンローのポスターの上を漂い、薄い褐色の染みと、幾筋もの灰色の亀裂に汚れた白壁の天井に届いてたゆんだ。

へそうか、二十三歳になったのか、格別の感慨や決意が生れるべくもなかった。ただ、ぼく自身も忘れていた誕生日を、この都会の中でたったひとり記憶し続けていてくれたガスマール夫人について考えることで、おのずから生れる感傷的気分に浸りながら再び睡りにおちていった。

アンリエット・ガスマールは一九三七年パリで若いユダヤ人の画家レオン・ガスマールと結婚した。当時画学生としてパリに滞在中だったぼくの父はレオンに弟のように愛され、同年輩のアンリエットとも親しくなった。一九三八年の暮、騒然としたヨーロッパから父は帰国し、翌年の夏、ガスマール夫妻は大戦前夜のパリからアメリカに亡命した。講和直後、画家としては二流の父をアメリカへ招いたのはニューヨークの画商ガスマール氏であり、夫妻は父の凡庸な風景画を何十枚も買いとってくれたうえ、アパートの一室に五年間も居候させてくれたのだった。結局父は芽の出ないまま帰国し、小学生になったぼくに対面したわけだ。その後の父は健気な世帯主の道を歩んだ。彼は経済人として有能だった妻の父に頭を下げ、その縁故である短期大学の美術科の教師の席を与えられ、彼の能力にふさわしい教師と日曜画家と家庭人という三位一体の生活を五年余り続け、ぼくが十四歳になる少し前に、四十四歳の生涯を閉じた。

母はニューヨーク時代の父の絵を何枚か後生大事に保存していて、父が亡くなった後、居間の壁に陳列し、ぼくの部屋の壁にもそのうちの一枚を飾った。少年期のぼくは一度だってニューヨークの下町をくすんだ暗褐色を主調に描いたその絵を面白いと思って眺めたことはない。

要するに、厭味のない温和な父の性格がそのままあらわれた絵だと思った。

そうした、ぼくにとってどうでもいい父の経歴と、それに繋がるガス・マール夫妻との関係が、にわかに身近かな問題に変わったのは、ぼくが十九歳になった年の事件のためだ。その頃ぼくはエスカレーター・コースと呼ばれているある私立学校の附属高校を卒業し、良くも悪くもない成績で大学の法学部に入学し、一年が過ぎようとしていた。ぼくは自分の未来にさして興味がなかったが、あと三年経てばいくらか出来のよい語学力と、母の父の縁故と、大学の箔で、しかるべき商事会社にも就職することは目に見えていた。ぼくはそうのようにしてやってくる未来を決して積極的には拒否しない型の人間として気楽に現在を楽しんでいた。

事件は馬鹿馬鹿しい形で襲来した。大学に入って間もない頃、ぼくはKという女子学生と知り合い、高校時代からの懸案だった女性の肉体に対する好奇心を充たした。Kもまたぼくに劣らず男の肉体に憧れていたので、ぼくたちは互いに行為の習熟を競った。三カ月も経たぬうちに、ぼくたちは性の快楽についてしたたかな識者になったことを自負するようになった。その習慣化した楽しみが決して飽きないことを、Kはある日の行為のあと「あたしたちは刀と鞘ね」という言葉で表現したが、ぼくにも異存はなかった。その年の暮、Kがあるテレビドラマ

の主演女優を探していた人々の目にとまった。彼女は忙しくなり、以前のように気安く会えなくなつた。彼女の興味も性の行為に熱中することから、連続ドラマの主役を上手に演じることに移っていったように思えた。しかし、ぼくの関心事は依然として性の行為にあった。特訓と称する演技指導を三カ月間受けた後、Kのドラマのビデオ取りが始まつた。ぼくはぼくと同じように性に熱中できる相手を探し、新しい相手としてKと同じ教室のTを選んだ。Tもぼくとの関係が「刀と鞘」のように具合よく進行すると判断したようだった。Kが向上心に溢れた行動派の女子学生役を演じているテレビドラマをTと一緒に眺めながら、ぼくは事態が好ましい形に落着いたことに満足していた。

だから、Kがぼくの裏切りを怒る言葉を十枚の便箋にぎっしりと書きこんで、ガス自殺をしたときいた時、ぼくは呆氣にとられてしまった。刑事に訊問され、新聞や雑誌の記者に問いつめられ、ぼくは醜聞の主役となつた。

『一週間前、彼の裏切りがはっきりした』Kの遺書の文字はその堂々たる確信でぼくを怯やかす。五月のある晴れた日だった。ぼくはKに呼びだされ、一カ月振りに彼女が出演しているテレビ局に近い喫茶店で逢つた。彼女は出演中のドラマが好評で、新しい作品の口もかかつてい

るが、もしばらくいまの作品だけに集中するつもりだと語った。それから、来月になれば少し閑もできそうだから、喫茶店ではない場所で逢えるようになるかもしれないと言った。そこでぼくは電話では伝えにくい、ぼくの側の事情と考え方を話した。ぼくたちが互いに性の行為に好奇心を持ち、それが楽しいものと判ったとき良い相手役となり、Kの関心の主要な部分がテレビで演技することになったとき、ぼくは自分の関心の依然として主要な部分を占めている性の相手役を探した事情を……。『彼があたしを性の対象としか考えていないことが分った。

それがはっきりしたいま、賢い生き方は彼をさっぱり忘れてしまうことだろう。しかし、そんな風に生きていくことはとてもできない』なぜかぼくは遺書の言葉がKの言葉であるより、Kが演じたテレビドラマの女子学生の言葉のような気がした。結局Kは『不誠実な男を愛してしまった』自分自身を罰し、その自尊心ゆえに『愛に絶望し』て死んでしまった。Kとの現実の関わりから遺書の文字を納得するのは難しいが、それでも彼女が遺書に書かれた感情を抛りどころに死んだことは確かなのだろう。へかわいそうなことをした」という狼狽とともに、へ彼女はテレビドラマの劇中人物でありすぎた」と思った。ぼくは「悪人」であっても仕方がないが、「悪人」と「その犠牲者」にふさわしいドラマが、ぼくたちの間に存在したとは思えないのだ。

もしあの時、Kが期待ほどに面白くないテレビの仕事からくる欲求不満の解消のために、ぼくが必要なのだとでも言ってくれば、ぼくは喜んでKのために役立つ方法を考えたと思う。もしその程度の心遣いが友情とか愛とか呼ぶものの形なら、その種の感情をぼくはあの頃も持っていたし、今も持っている。しかしKは眉を陰しくし、決然と席を立った。白い紗のカーテンの向うに暗れた空があり、プラタナスの緑があり、樹や建物や人の影を黒く滲ませる白い舗道があった。ぼくは喫茶店の二階の窓から、そんな五月の風景の中を向いのテレビ局の方に真直ぐ歩いていくKの後ろ姿を見送った。

へあれしきのことで、人間は死ねるのか」という疑問にぼくはとらわれた。ぼくは性の直截な逸楽の裏側に、しっかりとこびりついた感情の錘りをひきずって生きる人間の姿を思いうかべ、やりきれない気分になった。事件直後、Tが非難にみちた眼差しでぼくから遠ざかっていったとき、ぼくは予感の中を感じた。ぼくが性の行為の中で味わった透明な明るさは実はまやかして、性はいつ感情の海に溺れ、エゴイズムの暗礁にのりあげるかもしれない、危険を秘めた人間関係の中でしか成立しないものなのか。

一方、ぼくの周囲では醜聞の祭典が進行し、正義がなにより好きな母方の祖父を中心に、ぼ

くに対する制裁の審判が具体化した。Kが死を賭してぼくを被告席に告発した以上、ぼくは何らかの見返りを死者に捧げなければならないだろう。審議は夏中続き、秋に判決が下った。ぼくは大学を退学し、ぼくの唯一の弁護士だった母（もっとも彼女の立場は、裏切り者にも慈悲を、であったが）の窮余の一策が容れられ、ぼくは父の亡霊に導かれて、ニューヨークのアンリエット・ガスマールに身柄を預けられることになった。

その当時、ガスマール氏はすでに他界し、夫人も画商の店を畳んで、グリニッジ・ヴィレッジの広いアパートにひとりの黒人の女中と住んでいた。毎年のクリスマス・カードの交換のほか、これという交渉もなくなったガスマール夫人に、母がどんな方法で依頼し、夫人がどんな心算でぼくの身柄を三年間の期限付きで預かる決心をしたのかわからない。ともかくぼくは予測された未来が少し変ってきたという意識を持ったが、それは母や親戚の者たちがぼくの前途に抱いた絶望とは余りかかわりのないものだと思う。

ニューヨークの空港で、ぼくは出迎えてくれたガスマール夫人の穏やかな視線に安堵した。事件から四カ月、ぼくは無数の審判者、陪審人、道德家、正義漢、消息通の視線に疲れていた。

税関からロビーに通じる通路の柵に身をもたせて、ぼくに向って快活に手を振るガスマール夫人は、フードのついた銀色の毛皮のマントと、その下に着たオレンジ色のワンピースが中肉背の姿態によく似合って、五十歳と思えない若々しさを感ぜさせた。

「あなたがひと眼で分ったわ。お父さんとそっくりだから……」

夫人がぼくに理解させるために、ゆっくり言葉を区切った英語で話しかけてきたとき、ぼくは亡くなった父親を愛し続けてきた孝行息子のように涙を零したのだった。

ずっと後に、ぼくは自分の口から、ニューヨークに来る契機になった事件についてガスマール夫人に話した。

「それでは……ケン、あなたにとってここは流刑地なのね。そういえば飛行機から降りてきたケンはこわい眼をした少年だったわ」

そんなときも、彼女の穏やかな眼差しと柔らかい声に変化はなかった。

六階建てのアパートの二つの階を占めているガスマール夫人の家で一室を与えられ、ぼくは九カ月間英語学校に通った。相変らず未来について考えることはなかったが、言葉を覚えることには勤勉な学生だった。九カ月後、言葉によってこの国の人々と関わることにほとんど不自

由がなくなり、ニューヨーク大学で奨学金をもらい、文化人類学を専攻することになった。文化人類学を選んだのはガスマール夫人のサロンの影響だ。彼女のサロンは画商時代から十年も続いていて、二年前にガスマール氏が亡くなり画商をやめてからも、月に二度のサロンのパーティだけは開かれている。画家や美術批評家や写真家などの他、実に多種多様な人物が古参新参とりまぜて出入りしていた。ぼくを「ブラザー・ケン」と呼んで同志扱いする黒人運動の若い指導者もいたし、カナダ・エスキモーや南米のインディオの記録を延々と撮り続けている記録映画の監督もいた。毎年メキシコに出かけて貧民の家族の成長歴を研究している文化人類学者フランク・コールマンもそのひとりだ。彼の口からきく、メキシコ・シティの貧民街のセメントの壁に囲まれた城塞のような共同住宅に住む人々の逸話は魅力的だ。彼の話に登場するどんな人物たちも、結局は明日をも知れぬあてのない人生を送っているのだった。コールマン教授の持ち帰ったテープをサロンのテープレコーダーにかけ、英訳されたプリントを参照しながら、何人かの男と女が自らの人生について語る声にぼくは魅せられた。例えばエレナという娘の声には韻文を朗読するような美しい抑揚があった。彼女は詩を読むように、性懲りもない男への夢想、愚かしく繰返される性交と妊娠、ぐうたらな男たちの暴力からの逃亡の物語を語る